

ルソーとヴォルテール

——『学問芸術論』まで——

井上堯裕

Rousseau and Voltaire: Up to the Publication of *Discourse on Sciences and Arts*

In 1760 Rousseau wrote to Voltaire "I hate you". The reason why it caused him to write this insane letter might be found in the particular situation in which two rival thinkers had been involved by seeking a refuge together in the city of Geneva. But the absurdity of Rousseau's resentment against Voltaire also suggests the existence of a certain complex which might be deeply rooted in his mind. In this article the author attempts to examine Voltaire's intellectual influence on the evolution of Rousseau's morality by tracing back to the period when the latter attended to his self-education at Madame Warren's house. Probably, throughout the conception and the composition of his *First Discourse*, Rousseau should have evoked a double image of Voltaire, whose genius he kept admiring but of whose morality he now became suspicious.

一七六〇年六月十七日、ルソーはヴォルテールにむかつて「私はあなたを憎む」と書き送った。これにより二人は公然の敵同士となった。とりわけヴォルテールは、これまで、ともかくもルソーを哲学者仲間の一人とみなし、その文才を高く評価してきた。そして想像で作りだした「善良な未開人」の役柄を、この文明社会の真只中で実践しようとする風変わりな男として、むしろいささかの好意をこめてからかいこそすれ、その思想や言動をまじめに受け止めてはこなかった。だが、この全く理解できない手紙を受け取って以来、彼にとってルソーは完全な「氣違い」となり、さらには、味方を捨て敵（ジュネーヴの牧師たち）と通じて陰謀を働いた「偽の同志」として、その憎しみと怒りの対象となった。ルソーがこのいかにも非常識な手紙を書き、二人の対立が抜き差しならない憎みあいとなったのは、直接にはジュネーヴにおける演劇禁止の問題をめぐってであり、また背景としては百科全書の発禁を中心とする啓蒙思想弾圧の危機があった。だが、なぜルソーがヴォルテールにたいし不条理な被害者意識をつのらせ、「憎む」と書くまでに思い詰めたのか、その原因は彼の心より深くにあると思う。そこには自分の思想形成に深くかわってきたヴォルテールにたいする複雑で深刻な心情が見出される。

(1)

二十歳代のルソーはヴォルテールを自らの師とし、尊敬と憧れの眼で見っていた。「十五年来、私は貴方のお眼にとまるべく、また、貴方が何ほどかの才能を認められた若いミュージズたちにお恵みになられているお心遣いに値すべく

努めております。⁽¹⁾これはルソーがヴォルテールにあてた最初の手紙の書き出しである。一七四五年十二月十一日というこの手紙の日付からすると、十五年前を多少厳密に受けとって、それが一七二九年アマシーのヴァラン夫人の家で『アンリアード』を読んだことを指すのか、一七三一年ソルールで試みた遊びのような最初の詩作を指すのかは問題であるが、何れにせよ、二十歳前後、文学に興味を覚え始めたその最初からヴォルテールの名声が彼を惹きつけていたことは間違いない。実際、『告白』によれば、ルソーに文学と哲学への関心が芽生えたのは、一七三五年頃シヤンベリのヴァラン夫人の許であるが、彼を導いてくれた若い教養ある土地の貴族コンジェとともに、二人は「ヴォルテールの書いたものはなに一つ見逃さなかった。」⁽²⁾ルソーはヴォルテールの著作を読むことによって「優美な文章を書く術を学びたい、そして私を魅了するこの著者の生彩な文体に倣うよう努めたいという欲望」を抱くようになり、また『哲学書簡』によって学問への興味を呼び覚まされたのである。一七三七年には旅先のグルノーブルで、ヴォルテールの悲劇『アルジール』の上演を見る機会があった。そして、あまりうまくないのに、それでも「息の詰まるほどに」感動したことをヴァラン夫人に書き送っている。⁽³⁾その頃書かれたと考えられる『ヴァラン男爵夫人の果樹園』は、ヴァラン夫人を讃え、シャルメットの田園とともに過ごした、平穏な享楽と読書や思索の日々の幸福を歌った長詩であるが、ルソーはそこで彼の学んだ古今の学者や詩人の中に、ヴォルテールの名を「心打つヴォルテール」としてあげている。⁽⁴⁾この場合、『アルジール』についてのルソーの感想に照らしてみれば、ヴォルテールが人の心を打ち、感動させるのは、まず彼自身が「偉大なもの、崇高なもの、悲壮なものを感ずる心」の持ち主であり、さらにその高尚な心情を、劇を通じて、平凡な感情しか持たぬ人々にも伝える才能を持っていたからである。グイエの言葉を借りれば、ルソーがヴォルテール劇に覚えた感動においては、「形式的な美と道徳的な美とを見分けることはできない」のであり、ルソーが作品を通じて思い描いていたヴォルテール像は「偉大な詩人で偉大な道徳家、むしろ

偉大な道徳家であるがゆえに偉大な詩人⁽⁵⁾であつた。

二十歳代の後半（一七三七年—一七四二年）の時期は、ルソーの生涯の重要な転機であつた。ヴァラン夫人に別の愛人ができ、ルソーは、夫人の愛においても所帯の切り盛りにおいても、その男に従属した立場に立されるようになった。また夫人の家計事情の悪化により、無為徒食のルソーを養うことは次第に難しくなつてきた。ようやくルソーは自立を迫られていた。彼は居心地の悪くなつたヴァラン夫人のもとから離れようと試み、何度か舞い戻つた後、一七四二年七月、やっとパリに向け出発することになる。また、この頃から彼は自立の手段として文筆を考へるようになる、いく篇かの詩と劇を書き、雑誌『メルキュール・ド・フランス』に投稿したりしている。

そのなかで一七四〇年春から一年間、マブリ家の家庭教師としてリヨンに滞在したことは貴重な体験であつた。後の彼の生涯から考えれば、二人の弟マブリとコンディアックの知己を得、パリで啓蒙思想家たちの世界に導かれる機縁を得たこと、また家庭教師の体験が『エミール』に至る彼の教育論の端緒となつたことがあげられるだろうが、さしあたりこの教養ある名門法服貴族マブリ一家の厚遇を得て、フランス第二の大都市リヨンの社交界やアカデミーの生活に触れたことがより重要な意味をもつていたと思う。その不器用で人見知りをする性格から社交術を身に付けることはできなかったが、それでも彼は至るところで温かくもてなされ、さほどの反感や違和感を覚えることもなかったようである。禁欲的なジュネーヴと小地方都市シャンペリの生活しか、ほとんど知らなかったルソーにとって、この大都会の繁栄とその上流階級の洗練された生活は、彼を魅了する全く新しい世界であつたに違いない。また「リヨンのヴォルテール」と称されたボルドラ知識人との交際は、彼が独学で身に付けてきた教養とその知的才能を試す最初の機会であり、彼は新鮮な刺激を受けるとともに、自信も得たことであらう。

リヨンの二人の友人宛に書かれた書簡詩『ボルド氏への手紙』⁽⁶⁾と『パリゾ氏への手紙』⁽⁷⁾は、後のルソーの思想に照らすと著しく異質に見える現存社会の肯定と文明礼賛の要素を含むことで知られている。これまで彼が信じてきた清貧に生きる美德という共和制的な道徳を、「うつろな幻」、「生まれつきの偏見の未熟でにがい果実」ときめつけ、「生きる楽しみをふやしてくれる清純な産業」を称え、「社会で地位の不平等が少なくなることは、好ましいことではないだろう」とさえいう。とりわけ絹産業によるリヨンの繁栄を賛美し、「世界の宝庫、豊かさの泉、フランスを飾る幸せな町」とうたう『ボルド氏への手紙』は、その詩句の具体性で眼を引くが、それらとともに、この二つの詩には、確かに自分の社会観を一変するような新しい世界に眼を開かれたルソーの心情が、かなり率直に述べられている。だがそれは何のためらいもなしにというわけではない。

二つの詩はともに友人に助言を求める形で書かれている。前者は世人におもねることを厭いながら、さればとて何を詩作のテーマとするかに惑う心情を訴え、後者は有力者の支持を求めて成功をかちとるべく、パリに出發すべきかについて問うている。これらの詩はありきたりのA—B—A形式を取り、文明社会礼賛のくだりは〔B〕の部分にあたる。全体とすれば、ピューリタン共和国ジュネーヴで育てられ身に付いた道徳に見切りをつけながら、さりとはいえフランスの上流社会の習わしに嬉々として従うこともできない煩悶が、かなりくどく、述べられている。『パリゾ氏への手紙』では、まるで「自分自身と自分の不幸しか問題になっていない」⁽⁸⁾。確かにそれは単なる修辭上のテクニクにすぎないともいえ、とりわけ自分の不幸、苦悩を述べ立てて、あらかじめ内なる自分の無実を確保しておくのは、いかにもルソーらしい手法ともいえるだろう。だがこの際は、この思い乱れる心の「告白」を、少なくともある程度は真実と解釈するほうが当を得ていると思う⁽⁹⁾。

この二篇の書簡詩については、その文明のもたらした洗練と豊かさを称賛するエピキュリア的な道徳にふれて、

ヴォルテールの有名な詩『ル・モンダン』（現世人）が引合いにだされる。⁽¹⁰⁾ この物議をかもした詩を、ルソーが知らなかったはずはまずない。しかし、三者を読みくらべるかぎり、直接の影響を指摘することもできない。とりわけヴォルテールと異なつて、ルソーにはキリスト教的禁欲への言及が全く見られない。シャルメットでジャンセニスムの著作を読みその影響を受けたと『告白』で述べ、⁽¹¹⁾ また、多分この二篇の詩にやや先立って書かれた『大シャルトルーズ修道院修道士を称える詩』で、修道生活の幸福への憧れを歌っていることに照らして、検討すべき問題であろう。

ともあれ、立身出世を求めてパリに向かうルソーの胸中には、憧れのヒーローとして同姓の大詩人ジャン・バティスト・ルソーとともにヴォルテールがあつたと推測しても誤りはないだろう。『アルジール』のモラリストが、同時に『ル・モンダン』を書く矛盾は、さしあたり、ルソー自身の内面にもある矛盾——混乱を覚えながらもまだ突き詰めるようとはしない矛盾であつた。

ようやく自立への道を歩むべくパリに出た三十歳のルソーは、上流社会に関心をもつて迎えられ、多くの人々の保護を得たものの、あいつぐ手厳しい挫折を味わわなければならなかつた。ひと儲けの期待をかけた新案の記譜法『新しい音符についての提案』は、アカデミーの支持を得られなかつた。プロイ夫人の推薦で得たヴェネツィア大使秘書の職務は、武家貴族で無能なうえに尊大な大使モンタギュー伯と性格上折りあわず、一年足らずで衝突して辞めパリに戻つた。オペラ『バレ・レ・ミューズ・ギヤラント』は、試演を聞いたラモーから酷評を浴びせられた。だがこの作品は、思いがけず、ルソーをヴォルテールと初めて接触させることになった。

一七四五年十二月、フォントノワの勝利を祝う催しの一つとして、この年の二月に上演されたヴォルテール作詩、ラモー作曲のコメディ『バレ・ナヴァールの王女』が、改作のうえ題も『ラミールの祝宴』と改め、ヴェルサイユで

上演されることになった。ところがヴォルテール、ラモーともに他の仕事に多忙で、この失敗作の手入れには熱意なく、代わってこれを引き受ける者が求められていた。その時、原作の注文にあたったリシュリユー公が、たまたま『レ・ミューズ・ギャラント』の試演を聞き、ルソーの才能を評価し、作詞作曲の二役をこなせる彼にこの仕事を与えたのである。ルソーの行った手直しの中身は、三幕物の原作を一幕物に短縮するため元の歌詞を削除補作し、ラモー作曲のアリアは残してつなぎのレチタティーヴォを作曲しなおし、序曲を新たに作曲するというもので、二ヵ月をかけてこの仕事を完成した。しかし、ラモーの弟子で熱心な支持者ラ・ボブリエール夫人の意見で、ルソーの改作はそのままでは採用されず、さらにラモーにより修正されることになった。そしてルソーの関与は公にされることがなく、結局、ここでも彼は名をあげることができなかった。

この改作を機に、ルソーとヴォルテールのあいだに最初の書簡のやりとりが行われた。先にその書き出しの部分を引用した一七四五年十二月十一日付けのルソーからヴォルテールにあてた手紙と同年十二月十五日付けのヴォルテールからルソーにあてた手紙とが、それである。⁽¹⁴⁾ルソーはその手紙で、まず「私は恭しくお断りを申し上げましたが、公は重ねて引き受けるよう申され、私は従いました。私の境遇からはそうする他はありません」と改作を引き受けた事情を弁明し、台本の変更箇所とレチタティーヴォについて、「私が美と真理から、すなわちあなたのお考えからはずれている箇所をお示し下さるようお願い申し上げます」とヴォルテールの意見を求めている。他方、ヴォルテールの手紙は「あなたはこれまでいつも切り離されていた二つの才能を併せ持っておられます。すでにこの二つの理由だけで、私にはあなたを尊敬し、愛しようとするのに十分です」と始まり、急いで書かなければならなかった原作の不備を釈明し、「幸いにもそれはあなたの手のなかにありますから、あなたがそれをどうなさろうと全くご自由です。それら一切をもう忘れておりますから。」と一切をルソーに任せるといったうえで、申し訳けのようにヒロインが牢

獄から「庭園だか宮殿だかに」一遍に移るのは魔法によるようで不自然ではないか、検討するよう求めている。⁽¹⁵⁾「こうしたつまらない事柄をまじめに問題にするのは、人間にあまりふさわしくないことはよく存じております。しかし、結局のところ、なるべく人の気分を損ねないようにすることが必要なですから、不出来な余興のオペラとはいっても、できるだけ道理に適ったものにしなければなりません。」

この二通の手紙は、書かれた日付を考えると少々奇妙なものであり、このあたりの事情を書いた『告白』の記述⁽¹⁶⁾には、思い違いか嘘か、幾つかの誤りがある。『ラミールの祝宴』の上演は十二月二十二日に予定されていた。ルソーもヴォルテールも、意見を聞いても述べても、もう間にあうはずのない時点でこれらの手紙を交換したのである。全くわれ関せずのヴォルテールは、ありそうもないことではあるが、上演の予定日すら忘れていたのかも知れない。だがルソーの場合、原作に手を付けるまえに、事前の了解を求めたという『告白』での言明は明らかに誤りである。なぜ上演の直前になるまで手紙を書かなかったのかという点だけならば、ルソーの手紙には、パロ氏なる人物を介して修正箇所を伝えたとの記述があり、それに対するヴォルテールの返事を待つままに、自身で手紙を書くのが遅れてしまったのかも知れない。だが、おそらくこれらの手紙は、改作に関与されたくないルソー、関与したくないヴォルテール、それぞれが、わざと遅くなってから、もう間にあわないことを十分に承知した上で、遣り取りした儀礼的なものであったのだらう。⁽¹⁷⁾

『告白』の記述には、他にもかなり重大な誤りがある。たとえば、プレイアード版全集所収の『ラミールの祝宴』のテキストに従えば、「おお、死よ！」で始まる冒頭の独白の歌詞は、ヴォルテールの原作ではなく、ルソーの補作である。⁽¹⁸⁾だがこれらの誤りは、ヴォルテールとの激しい確執の十年を含む二十数年後に書かれたものであることを考えれば、書いているルソー自身に即しても、思い違いか嘘かは判然としがたいであらう。ここではむしろこの二人の最初

の交渉の時点にたつて、ヴォルテールとルソーそれぞれの思いの間にある、はなはだしいギャップに注目したい。ヴォルテールにとってみれば、このコメディール・バレは、そもそも本気で書くにも値しない宮廷行事のためのオケージョナルな作品でしかなかった。修史官の地位と年金を手にいれるのに役立ったので十分で、自分の才能の偉大にふさわしからぬ凡作であったことだろう。それに手を入れるという苦勞な仕事をしている男がいるとなれば、その男を立てた挨拶をしてやるのが、礼儀であり、度量というものではないか。このままならば、ヴォルテールがルソーを思い出すことは二度とないだろう。それにたいして、ルソーの思いが熱かったことはいうまでもない。「二人の大家に協力させてもらっているという思いが、私の才能を高めた」と『告白』に記された氣負いに嘘はないだろう。そして立派に仕上けたと思い、称賛を期待しただけに、蒙らなければならなかった挫折の痛手は大きかったろう。だが、この〈不当な〉挫折の原因はラモーにあって、ヴォルテールにはない。この事件でルソーのヴォルテールに対する敬意が大きく揺らいだとは思えない。ヴォルテールとの関係でいえば、ルソーはこの機会をとらえ、ヴォルテールに取り入り、その好意を得、庇護を得ることに成功しなかった。だがそれは、いつものとおり、与えられた好機を生かすことのできない彼自身の不器用さによるのであって、ルソーは惨めさを噛みしめるほかはない。ただ、この宮廷の祝宴のための「不出来な余興のオペラ」について、「美と真理……すなわちあなたのお考え」などと大げさで場違いな言葉を書くルソーと、もっぱら「なるべく人の氣分を損ねないようにすること」を肝要と心得るヴォルテールとの認識の差は大きく、この改作の機会に、これまでその作品を通じてしかヴォルテールを知らなかったルソーが、その宮廷人としての一面を直接に知ったことは、後に重要な意味を持つことになるだろう。

(2)

一七五〇年、ディジョンのアカデミーに提出した懸賞論文『学問芸術論』の入選と成功は、いうまでもなく、ルソーの生涯でもっとも重要な画期をなすできごとであった。ルソーがこの『学問芸術論』の構想を、ヴァンセンヌに向かう途上で、劇的な靈感によって得たことは有名である。⁽²⁰⁾一七四九年十月始めのある日、午後二時ごろ、筆禍によりヴァンセンヌに投獄されているディドロを見舞うために、徒歩でパリを出たルソーは、歩きながら読んでいた文芸誌『メルキユール・ド・フランス』のディジョンのアカデミーの懸賞論文募集の記事に、ふと眼をとめた。そしてその課題を読んだ瞬間に、彼は、歩き続けることが出来ないほどの激しい感動に襲われ、しばらく並木のもとに身を横たえなければならなかった。ところで、この靈感のもととなった課題「学問と芸術の再興は、習俗を純化するのに貢献したか」とは、当時各地のアカデミーが盛んに行っていた懸賞論文の課題としては、取り立てて珍しくもなく、大胆なものでもなかった。⁽²¹⁾実際、文明の進歩に疑問を投げかけ、古来の質実な道徳、風俗を懐かしみ、その復興を説く議論は、古代から近代まで、むしろありふれたものである。それならば、なぜ、ルソーは、それを眼にして、言い表わしようのない精神の混乱と高揚を覚え、なぜ、彼の思想の中核となる「人間は本来善良であり、制度によってのみ邪悪となる」という確信に目覚めたのだろうか。

さらに、本来、この課題は、「学芸の再興」、すなわちルネサンス以来の文明の発達、が社会の道徳的向上に役立ったかを問うたものである。つまり、そのままに受け取れば、近代ヨーロッパの歴史の具体的な検討を要求している。⁽²²⁾ところがルソーは、課題の趣旨を拡大解釈し、「学問と芸術の進歩は、習俗を腐敗させたか、それとも純化したか」と

いう、時代を超えた普遍的な問題に変更している。ルソーが課題を眼にした瞬間に、この読み変え（読み違い）をしてしまったことは間違いない。そのうえ、ルソーは、『マルゼルブへの手紙』の記述を信じるならば、さらに同じ瞬間に、学問と芸術を超えて、それらを含む社会体系、社会制度全体が問題なのだと直感的に悟り、「人間は本来善良であり、制度によってのみ邪悪となる」というあの確信に到達したことになる。

ここでは、なぜルソーが、この時、この靈感を得たのか、それを理解するために、この時期の彼個人の内外の状況を検討しようと思う。そして、その結果として、グイエとともに、私も、ルソーのこの思想的転換の陰に、確かにヴォルテールの姿を認めることが出来ると思う。⁽²³⁾

ヘヴンズは、ルソーがヴァンセンヌに向かう道程を思い起こしている。⁽²⁴⁾パリの中心を出発したルソーは、家並の続くサンリットノレ街を三〇分ほど歩き、バスティーユの前に着く。そして、そこで市外に出てまもなく、パリの捨て子を収容する孤児院へオスピス・デ・ザンファン・トルヴェンの前を通り過ぎる。ルソーは、この孤児院に、すでに二人の子を送っていた。この孤児院のあたりからは、遠く前方の丘には、当時は最愛の友であったデイドロの幽閉されているヴァンセンヌの天守閣が見え、振り返ればバスティーユのそそり立つ巨大な黒い壁が見える。それらの建物は、当時のルソーにとって、絶対権力の圧制と不正、社会的境遇の不平等の具体的な表現と写ったに違いなひとへヴンズはいう。その先、家並はしだいに疎らとなり、田舎道に変わっていく。並木は刈り込まれていて木陰はなく、この年の長い残暑で歩くのはつらかった。ルソーが靈感に襲われたのは、この並木道だった。こうして不当に拘禁されている親友を見舞うために、二里の道を歩いて通うルソーの胸中には、社会的不正への重苦しい憤りがあつたに違いない。華やかな文化の装いの下に、このような不正や不平等が現に存在する以上、一体、学芸の発展が人間を真に

道徳的に向上させたといえるだろうか。そしてこの認識は、ニュアンスの違いはあるにせよ、それ自体としては、現に権力の暴威を直接に体験した囚われの身のディドロにとってこそ、より痛切なものであったろう。⁽²⁵⁾ 学芸の発達、人間理性の進歩は、未だ社会秩序にはその力を及ぼしていない。

しかし、道中のルソーが抱いていた感情は、社会的不正への怒りだけだったろうか。生まれたばかりの二人の子供がひと時を過ごし、そこから田舎へ送られていったはずの孤児院の前を通り過ぎるとき、『告白』のむきになった感のある弁明にもかかわらず、心に何の動きも覚えず、自らを省みることなかっただろうか。だが仮りに捨てた二人の子供はおくとしても、ルソーは自分の境遇を顧みて鬱屈した思いを禁じえなかったろう。

先に述べた一連の挫折の後、さらに『レ・ミューズ・ギャラント』をオペラ座で上演させる企てにも失敗し、ルソーは、さしあたり「出世や名声を求めようとする企て」を諦め、暮らしを立てることに専念せざるをえなかった。⁽²⁶⁾ 彼は自分自身と伴侶テレーズ、さらにテレーズに寄生するその家族までも背負いこみ、収入を徴税請負人デュパン夫妻とその息子フランクィユの文筆活動上の秘書役に求めなければならなかった。酷使される割には安い手当に、生活は楽ではなかったが、しかし、傍から見てさらに一層惨めに思えるのは、自尊心が強いルソーが、自身の野心が挫折したあとに、こうして他人のために報われない仕事をしなければならなかったことであろう。ところが、実は『告白』を読むかぎり、ルソーは、まさに金で才能を搾取されているこの境遇に、さして屈辱も感じず反発も示していないのである。むしろ「パリでもっとも華やかな邸のうちの二つ」⁽²⁷⁾ デュパン家とデピネ夫人の家での社交やディドロ、グリムら仲間たちとのつきあい、そしてテレーズとの家庭生活に満足で幸福でさえある。

『告白』以外にも、当時のルソーが熱心なサロンの常連であったことを伝える証言がある。自意識が強く不器用で、社交界の流儀が身に付かなかったルソーは、むしろその一風変わった振る舞いと独特の才知により、社交界に迎えら

れていた。例えばデピネ夫人によれば、そのころのルソーは「浅黒い肌の男で、顔を生き生きとさせる輝いた眼」をしていて、「大層なお世辞屋で、洗練されていなかった。あるいは、むしろ、洗練されていないように見えていた。世間離れた人間の役を演じているが、実は非常に抜目のない男」であつた⁽²⁸⁾、グリムもまた「突然、彼はシニクを装う。そして、その性格に自然なところが全くないから、今度は反対の行き過ぎに走る」と評している⁽²⁹⁾。ルソーの敵となった二人のこの言葉には、もちろん、悪意が込められている。だが、この批評は、『告白』でルソー自身が述べている彼の社交界での流儀と、完全に一致している。彼は「シニクで皮肉屋」の「人間嫌いの」役を、十分に意識して演じていたのである⁽³⁰⁾。

この時期のルソーは、さまざまな役割を演じ、さまざまに変わる自分の姿を楽しんでいる。デイドロとともに計画したが、実現に至らなかった書評誌『ル・ペルシフルール』（嘲弄家）第一号の原稿に、彼が描いた自画像は、次のようなものであつた。「私自身ほど、私に似ていないものはない。だから、この途方もない多様性以外で、私を定義しようとしても無駄だ。……時にはいかつく粗野な人間嫌いでありながら、また、時には社交界の魅惑と恋の悦楽に恍惚となる。時に厳肅な信心家となつて自分の魂の救いを願ひ、この神聖な気分が長続きするよう一所懸命になるかと思ふと、じきに真正正銘の無信仰家となる。……要するに、変身の名人もカメレオンも女性も、私ほどには変わらない⁽³¹⁾。」この自画像を書いたルソーは、デイドロとモンテーニュの影響を受け、コンディヤックの感覚論に学んでいるといわれるが、それはさておき、私は、ルソーのこの自画像に、まさに彼もまた、魂の装う多様性に魅力を感じるロココの時代の人間であつたことを思いしらされる。だが、創刊しようとしているこの雑誌の標題にふさわしく、努めて軽妙さを求めながら、つい重苦しく理屈っぽくなってしまふ彼の文章は、また、ルソーがロココの社会の人間になりきれなかったことをも示してはいないだろうか。

一七四八年八月二十六日付けの手紙で、ルソーはヴァラン夫人に、できることなら自分の本当の境遇について、打ち明けたいのだがと書いている。⁽³²⁾「かなうことなら、あなたのご助言をぜひとも頂きたいところです。できればこの恥辱と悲惨の狀態から抜け出せるように、この難しい状況のなかで賢明に振る舞おうと努め、精神も健康もすり減らしています。そして、自分の運命を決めているのはただ偶然だけで、どんなに周到な用心をしても何の役にも立たないことに、毎日、氣付く思いがしています。」この手紙の示唆している差し迫った窮境が具体的に何であつたのか、知る手掛かりはない。⁽³³⁾だが、この手紙によつて、ルソーがこの時期の自分の生活を、時として「恥辱と悲惨の狀態」と感じ、やり切れない氣持を抱いていたことは確認することができる。四十歳に近づき、あい難く挫折を體驗して、人生の過半が過ぎた。生活の勞苦にまみれ、デュパン一家の秘書として金で才能を搾取されながら、普段は慌ただしい生活に紛れ、さほどの屈辱も反発も覚えることはない。だが上流社會に寄生した芽の出る見込のない二流の文筆家の生活に、おりに触れ、嫌惡と無氣力感の鬱積を覚えていたことは推測して誤りはないだろう。また、己の才能を世に認めさせ、華々しい成功を勝ちとる望みは、すでに諦めていたとはいえ、あるいはそれならばなおさらのこと、パリに出てきてからの惡戦苦闘に満ちた日々を、時に思い起こすことはなかったろうか。あの空しい希望と深い失意とに揺り動かされていた自分の〈人生〉は、一体、何だつたのだろう。

こうして、ヴァンセンヌへの往復の長い道筋で、おそらく、ルソーは幾度となく、自分の過去を顧み、現在を思つたことだろう。⁽³⁴⁾グイエはギユマンを引用しつつ、ルソーが、ディジョンのアカデミーの課題を読み靈感に打たれたとき、あれほどの興奮を覚えたのは、その瞬間に、彼が自分自身の姿を見、自分自身の良心を検討するよう導かれたからだと推測している。「確かに、彼の生涯においては、シャルメットの時期から、學問と藝術の側では、莫大な進

歩があった。しかし、収支の反対の欄では、その性行は、逆に何という墮落を示していることだろう！⁽³⁵⁾ 学問、芸術の進歩は、人間を墮落させる。それは、ルソーが自分自身を検討して得た結論である。だが、その検討を通じて、幸いにもルソーは、同時に、墮落以前の、本来あるがままの人間を、自分自身の奥底に見出すことができた。「ルソーを動転させ、夢にさせたのは、人間の本質的に善良な本性の発見である。その本性は、確かに原初的なものではあるが、しかし、決して失われてはいない。……ルソーは自分の生涯を検討し、そこに文化のもたらした損害を認めるが、その時、同時に、彼は自分の心が本性善であること、過誤や過失は、過去のものであれ未来のものであれ、この一種の根源的な無垢の状態を汚すことはないことを知るのである。」⁽³⁶⁾

さしあたり、靈感に打たれたルソーは、この無垢の状態の現実的な存在を、自分の内奥に、幼・少年期に形成された人格の基層として見出した。『学問芸術論』のなかに『ファブリキウスのプロソポベ』と呼ばれる文章がある。⁽³⁷⁾ 『マルゼルブ氏への手紙』と『告白』によれば、この二ページ余りの文章は、問題の靈感を受けたとき、ルソーがその場で鉛筆で書き留めた唯一の文章である。おびただしい数の「偉大な真理」が、彼の脳裏にひらめきひしめいていたその時に、なぜ、ルソーはこの文章を書いたのか。この文章の意味するものが、その時のルソーにとって、それほどに切実であったのは、そこに彼の本来の道徳的ありかたから墮落した自分へ向けられた批判が、幼いころ彼の傾倒した古代ローマの英雄の一人の口をかりて集約的に語られているからである。

ファブリキウスは前三世紀、共和制ローマの執政官である。彼は捕虜の引取りの交渉のため、エペイロスの王ピロスのもとに派遣されたが、王が好意から与えようとした金を拒み、またエピクロスの道徳、神学が話題となったとき、これを非とする言葉で王を感服させた。帰国後、執政官となつてからは、ピロスの侍医が暗殺を持ちかけたとき、憤慨してそれを王に警告した。⁽³⁸⁾ ルソーはこの共和制の美德を体現する剛毅で廉直な執政官を帝制ローマに蘇ら

せ、征服したヘレニズム世界の文化に支配されてしまったこの時代のローマの、奢侈に溺れ柔弱に墮した光景を嘆かせている。「神々よ、その昔、中庸と美德が住んでいた、あの茅屋とひなびた家々はどうなったのか。なんとという忌わしい壮麗がローマの素朴を引き継いだのか。この聞きなれぬことばはなにか。この柔弱な習俗はなにか。これらの彫像、これらの絵画、これらの建物はなにを意味するのか。無分別な人々よ、君たちはなにをしたのか。君たち、諸国民の支配者たる君たちは、君たちが征服した軽佻浮薄な人間の奴隷とみずからなってしまったのか。」——文明を奢侈においてとらえ、始原の質朴、剛健からの墮落として非難するこれらの言葉には、まさに、自分自身をかえりみたときに覚えたルソーの感慨が託されている。共和制ローマと帝制ローマの対照は、都市共和国ジュネーブとフランス王国の首都パリの対照に他ならない。ルソーをもっとも強く打ったのは、幼いころピュリタニスムの環境と空想の古代ローマの世界で養われた質朴、剛健、自立の精神と、豊かな文明のなかで惨めにへつらって生きている現在の自分の姿のあいだの強烈なコントラストである。忘れられていた本来の有徳なルソーがよみがえり、墮落したルソーを嘆いている。そして、この感慨は、ファブリキウスの口をかりて語られることによって、普遍的な文明批判に転ぜられ、『学問芸術論』全体の主張を構成している。実際、この論文では、少なくとも課題の文言そのものには反して、学問、芸術がそれ自体として扱われることはほとんどなく、それらを包括する文明全体の問題として扱われる反面、文明の問題は、奢侈とそれがもたらす道徳的な退廃に縮小されてしまっている。

このファブリキウスの弁説には、もう一つ注目すべき問題がある。それは、この弁説とルソーがリヨンでマブリ家の家庭教師をしていた時期との間、とくにそのとき親交のあったボルドとの間に、つながりが推測されることである。まず、当時大好評を博した古代ローマ人とフランス人の対比列伝があり、そのなかでファブリキウスが有徳な偉人として取り上げられているが、この書物を、ボルドあるいはマブリが、ルソーに貸したという説がある。⁽³⁹⁾ また『プ

『ロゾボベ』の一節「キネアスがわれわれの元老院を王者の集会と見立てたとき」は、キネアスがピロスにした報告を伝えたプルタルコスの一節「ことに元老院は大勢の王の集会と見えること」⁽⁴⁰⁾によっている。ところが『ボルド氏への手紙』のリヨンの繁栄についての一節「その豪奢な住民は王者たちのように見える」⁽⁴¹⁾も、また、このプルタルコスの一節を踏まえてはいないだろうか。さらに、ボルドが書いた『学問芸術論』批判への反論である『ジュネーヴのJ・J・ルソーの最後の回答』を見ると、ボルドも二度にわたりファブリキウスを持ち出していることがわかる。⁽⁴²⁾これらは、ルソーとボルドの間にファブリキウスについての共通した何か特別な記憶があること、そして、ルソーにとっては、それがリヨンで初めて「文明」を体験したときの生々しい記憶と結び付いていることを物語ってはいないだろうか。もしこの推測が許されるとすれば、ルソーは靈感に打たれたとき、まさしく自分が墮落への道を歩みだした起点に立ち戻っていたのである。そして、初めて大都市の上流社会の奢侈と洗練を知った時期を思い起こし、その頃の自分、文明の魅力にとらえられ、そのなかで自分の才能を開花させることを夢み、過去の素朴な信念を虚妄として捨てて、ことを決心しながら、しかし、ためらいを覚えざるをえなかった自分の心を、まさまじと思ひ浮かべていたことだろう。

ヴァンセンヌへの途上で靈感に打たれたルソーは、幼いころ形成された自分の人格の基層に、本来あるところの自分を見出し、そして同時に、それこそが本来あるところの人間の姿だと信じた。また、その本来の自分と、求めて文明社会に入り、その豪奢と洗練のただなかで恥辱と悲惨の生活を送っている自分の姿との対照に深く心を動かされた。もしルソーの心の動きがこのようなものであったとすれば、ルソーは、そのとき、自分自身を見る視線のさらに先、彼が見た自分の二つの姿のさらに奥に、ヴォルテールの二つの影を見ていたであろう。実際、そのことを推測さ

せるかなり確かな証拠がある。

ヴォルテールは、ルソーが『學問芸術論』で名前を挙げている、当時存命のただ一人の著述家である。しかも、ルソーは、その名を挙げるさいに、意味深長にもヴォルテールの好まない実名アルエと呼んでいる。

奢侈の支配するところ、芸術家は世間の称賛をもとめ、真にその才能にふさわしいが世に理解されない作品を書くよりも、世間に迎合し氣にいられる作品を書くこうとする。

「高名なアルエよ、われわれに言っていたきたい、あなたは勇壮で力強い美をどんなに多くわれわれの虚偽の繊細さのために犠牲にしたかを！⁽⁴³⁾ また、微妙微細な事柄に富んでいる優雅の精神が、どんなに多くあなたのうちにある偉大なものを失わせたかを！」

シャルメットでその作品を読み、その華麗で優美な文才に憧れていたところ、あるいはグルノーブルで『アルジュール』の上演を見たところ、ヴォルテールは、ルソーにとって「偉大な道德家であるがゆえに偉大な詩人」であった。だが、その後、ヴォルテールは、『ル・モンダン』によって、ルソーが違和感を感じながらも引きつけられていった、あの現代文明の洗練と奢侈のもっとも大胆で雄弁な擁護者として、世間を騒がせた。そして、当然耳にしたはずの世間のさまざまな評判は別にしても、ルソーは、『ナヴァールの王女』改作の一件で、ヴォルテールの宮廷人としての一面を、自らかいま見た。「結局のところ、なるべく人の氣分を損ねないようにすることが必要なのですから」というヴォルテールの手紙の言葉を、ルソーは決して忘れていない。⁽⁴⁴⁾ このアルエへの呼び掛けは、このヴォルテールの言葉への直接の反駁でなくて何だろうか。いまや、ルソーのヴォルテール像は二面的なものとなっている。その才能の偉大への崇敬の念は変わらないにせよ、ルソーは、ヴォルテールがその偉大な才能を、時には宮廷の人々の趣味におもね、その感性に合わせて用いる卑俗な魂の持ち主でありうることを知っている。高貴な天分を与えられた詩人、哲

学者ヴォルテールのこの卑賤な実体を示すのには、法曹ブルジョアの息子というその素性⁽⁴⁵⁾を表わすアルエの名こそふさわしいとルソーは考えたのではないだろうか。

ところで『学問芸術論』の執筆の最中、ルソーは、全くの偶然から、ヴォルテールにあてた二通目の手紙（一七五〇年一月三十日付）を書くことになった。⁽⁴⁶⁾劇場での些細な口論が、そのきっかけだった。ヴォルテールの悲劇『オレスト』を上演中、当時の常として、敵味方やじりあう中で、ルソーなる男（劇作家で評論家のピエール・ルソーといわれている）が、ヴォルテールに横柄な口をきき、憤慨させた。ヴォルテールには、このルソーという、かなりありふれた名が、どのルソーを指すのか分からなかったらしく、噂を聞いたルソーは、早速釈明の手紙を書いたというわけである。この事件がいつ起きたのかは分からないが、いずれにせよ『オレスト』の上演は一月十二日に始まっており、ルソーがほとんど間を置かず、対応したことは確かである。この対応の早さが、この時期、ルソーの念頭につねにヴォルテールの姿があったことを示唆しているとも言えるだろうが、それはともかく、この手紙は、いくつかの興味ある問題を含んでいる。

第一に、ルソーはこの手紙に〈J. J. Rousseau Citoyen de Genève〉と署名しているが、彼が「ジュネーヴ市民」と名乗ったのは、これが初めてだということである。もともと、ジュネーヴの法律によれば、カトリックに改宗したルソーは市民権を失っていたから、これは〈詐称〉で、彼もそのことを承知していたはずである。⁽⁴⁷⁾それならばなぜ、あえて市民を名乗ったのだろうか。おそらくは、あの靈感以来三ヵ月あまり、『学問芸術論』を書きつづけているルソーは、自分が今立ち戻っている本来の自分を、他ならぬヴォルテールにたいして、あえて名乗ったのであろう。そして、それは同時に、ヴォルテールをアルエと呼ぶことが、その素性を暴くことであったのと同様に、自分の素性をあかすことでもあった。君主や貴族に従属しその意を迎えなければならないブルジョアの息子ヴォルテールに

たいし、自分は主権を分かち持つ共和国の市民の子だ。実際、手紙の本文中でも、ルソーは自分は「共和国民」(publicain)であると述べているが、それはさらに次の問題につながることになる。

グイエも言うように、この人違いの誤解を解くための手紙で、ルソーは奇妙で独特な釈明の仕方をしている。⁽⁴⁸⁾つまり、こんな時の手紙の常識に反して、ルソーは事件のあった時の自分のアリバイを説明するのでもなく、一切の具体的な弁明は行わない。彼の無実の証明は、自分はこれこれの人間だから、そんな事をするはずがないという議論に尽きている。自分は「善良な人間」(un homme de bien)だから、ヴォルテールが『ナヴァールの王女』改作の時に示してくれた好意に、「忘恩と傲慢をもつて」報いるはずがない。そしてまた、自分は「共和国民」であって、「自由を崇め、支配と隷従とを等しく憎み、それを何人にも課せうと望まない」から、横柄、不遜な態度を取りうるはずがない。それは「奴隷やもっと卑賤な人間たち、つまり大家に嫉妬する小著述家たちに、よりふさわしい。」つまり、前提としてルソーの認識する彼の本性があつて、その本性から推論すれば、「矛盾率によってそのような行為は排除される」(グイエ)のである。「したがって、ジュネーヴのルソーは、あなたが彼の言葉とされている言葉を、決して口にしなかったのみならず、そのような言葉を彼は口にしないことを断言申し上げる次第であります。」——だがヴォルテールは、一面識もないルソーが「善良な人間」であつたり「共和国民」であつたりすることを承知しているだろうか。人違いの釈明としては全く無意味なこの演繹法は、しかし、靈感により「別の人間」に変わったばかりのルソーの高揚した心境においては、多分、彼が考えることのできた「新しい原則と両立しうる」唯一の弁明の仕方であつたことだろう。⁽⁴⁹⁾そもそも、事実をもつて自分が卑小な人間ではないことを弁解すること自体が、ルソーにとっては自分をおとしめることのように思われたであろう。

だが以上に述べたところだけでは、このヴォルテールへの追従のちりばめられた手紙の一面しか伝えていない。

「私は人に知られないで生きるとは確かに納得していますが、名誉を失って生きようとは思いません。」——ここまではよい。だが次は——「そして、すべての文筆家があなたにたいして払うべき尊敬の念、自ら尊敬に値するすべての人間があなたにたいして抱く尊敬の念を、仮りに私が欠くとしたならば、私は名誉を失ったものと思うでありましょう。」こうしたもってまわった風の追従には、確かに反語や皮肉と取れば取れるものもあるが、この手紙をヴォルテールに喧嘩を売ろうとするものというベスターマンの見解は、やはり彼の偏見というべきだろう。むしろ、この大げさな手紙には、ルソーがヴォルテールの好意を得ようと、いかに熱心であったかを読み取るべきであらう。そして、それは単に誤解を解き、怒りを避けようとするだけのものとは思えない。そこには、グイエも示唆するように、かつて『ナヴァールの王女』改作の際に期待して得られなかったヴォルテールの知遇を、この機会に得ようとする意図が明らかに読み取れるだろう。実際、この手紙を書くのに、ルソーはその折の彼の手紙とヴォルテールからの返事（グイエによれば、彼が返事と思っているヴォルテールからの手紙）を目の前に置き、間に四年余りの時間があるのに、まるでその文通の直接の続きのようにこれを書いているのである。

この手紙のこうした意図は、先に述べたこの同じ手紙でルソーが自負している「善良な人間」「共和国民」としての立場と、あるいは、執筆中の『学問芸術論』の立場と矛盾してはいないだろうか。また、より具体的には、次のような二つの矛盾を指摘することもできる。すなわち、まず、ルソーは『学問芸術論』のあのアルエへの呼び掛けを、すでに書いたか、書こうとしているところなのに、この手紙では、「あなたは友情とあらゆる美德を、それを知り、それを愛する人間として描いておられます」と、ひたすら有徳なヴォルテールを礼賛している。また、現に『学問芸術論』を書いている最中なのに、ヴォルテールにむかつては「(前回の手紙以来、) 私は、文学をあきらめ、名声を得ようという気紛れをあきらめました」と書いているのである。ルソーに反感を抱く人々には、こうした矛盾が我

慢のならない偽善と感じられるだろう。だが、矛盾は矛盾として、この時期のルソーの生活を考えれば、この手紙を書いた彼の心理は理解できる。ルソーはすでに四十歳に近づき、何の成功もおさめていない。デュパン家の秘書として生計を立て、変わり者の役で社交界に出入りしている二流、三流の文筆家にすぎない。『学問芸術論』の成功がなければ、『百科全書』の音楽関係の項目に、僅かにその名を残すだけで生涯を終わったかもしれない。そして一歳年下のデイドロに励まされ、その助言を求めながらこの懸賞論文を書いているルソーは、もちろん、それが成功することを知るよしもなく、また、到底、成功を期待できる状態にもない。彼は、今や「年並の分別により思慮深くなり始め」、自分の才能にも疑いを抱いている。⁽⁵¹⁾だが、その彼といえども、生活の糧をもたらししてくれる文筆業を捨てるわけにはいかない。——自分の運命は、おそらく、この今の暮らし、「文芸の共和国」のプロレタリア（最下層市民）としての生活に甘んじることなのだろう。ルソーの心境がこのようなものであったとすれば、機会をとらえてこの共和国に君臨するヴォルテールの被護者（クリエンテス）となろうとするのも当然ではないだろうか。

ヴォルテールはルソーに次のような短い返事をよこした。⁽⁵²⁾「あなたは、あなたの誠実さによって、ルソーの名の名誉を回復されました。問題の男は、決してジュネーヴの市民ではなく、人々がバルナスの泥沼と言っているもの市民です。彼は、あなたにはできないような過ちをおかし、また、あなたのような長所は持ち合わせていないように思われます。」ルソーが抱いたはかない期待に、ヴォルテールは、またしても、全く応えようとはしなかった。

一七五〇年初め、三十八歳のルソーは、こうして自分の姿の背後にヴォルテールの姿を見ながら、思想的な転換を行いつつあった。だが、この時点に立ったとき、ルソーにとってこの転換がもつ意味や重要性は、依然としてその後の成り行き次第である。もし、この懸賞論文が予想外の成功をおさめなかったら、思想の高揚は一時の気分におわ

り、彼はこれまでどおりの無名の生活が続けたらう。ディジョンのアカデミーが、この論文を入選作として選んだのは、そしてさらに、それが出版されると例を見ない程の成功を収めたのには、確かにルソーの知る由もないいくつかの事情があり、この時期の歴史的状況があった。そして、そこには一つの作品の理解あるいは受容をめぐっての、いわば文学の社会史の領域に属する興味ある問題が存在する。それらを検討するのが、次の課題である。

注

- (1) R. A. LEIGH (ed.), *Correspondance complète de Jean-Jacques Rousseau*, Genève, 1965-1970, C. C. と略し、巻数をローマ数字、書簡の番号をアラビア数字で示す。C. C. II, 139.
- (2) ルソーの作品については、フレイアード版全集(以下、P. I. と略す)により引用個所を示すこととし、巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で表す。この全集の解説、注を参照する場合も同様とする。また、『告白』については、併せて、原テクストの巻数を記す。P. I, 214 第五巻
- (3) C. C. I, 16.
- (4) P. I, 1129.
- (5) H. GOUHIER, *Rousseau et Voltaire*, Paris, 1963, p. 12.
- (6) P. I, 1130-1133.
- (7) P. I, 1136-1144.
- (8) P. I, 290, n. 5.
- (9) George R. HAVENS, *Jean-Jacques Rousseau Discours sur les Sciences et les Arts*, Edition critique, N. Y., 1946 (reprint ed., 1966), Introduction p. 14. (ハvensは『ペリシエの手紙』でルソーの行っている自己分析を、彼の告白の最初の試みとして見る。
- (10) 同前 p. 13, P. I, 1131, n. 1.
- (11) P. I, 242 第八巻

- (12) PL II, 1120-1122.
- (13) 『告白』第四巻に記されたソルールのできごと以来、ジャン＝バティスト・ルソーは、ジャン＝ジャックの尊敬する師でありつづけたようである。パリへ出た後も、その特集はウエルギリウスとともに散歩に持ち歩く愛読書であった。
- (14) C. C. II, 139, 140.
- (15) このいかにも不自然な場面転換は、改作後も、そのまま残っている。
- (16) PL I, 335-338 第七巻
- (17) グイエはヴォルテールの手紙をルソーからの手紙への返事ではなく、遅くなったものの、彼の方から改作者ルソーに書いた挨拶の手紙と考えている。しかし、必ずしも、グイエのように考えなくても良いと思う。
- (18) PL II, 1083.
- (19) PL I, 335 n. 1.
- (20) 周知のとおり、この靈感を回想した記述は三つある。一七六二年一月十二日付けのマルゼルブへの第二の手紙 (PL I, 1135-1136, Jean-Jacques Rousseau, *Lettres philosophiques présentées par H. Gouhier*, Paris, 1974, p. 82)、「一七六九年の初冬に書かれた『告白』第八巻 (PL I, 350-351)」、そして一七七三年ごろに書かれた『ルソー・ジャン＝ジャックを載へ』の第二の対話 (PL I, 828-829) がそれである。
- (21) M. Bouchard, *L'Académie de Dijon et le Premier Discours de Rousseau*, Paris, 1950, p. 50-.
- (22) ただし、ルソーだけではなく、応募者の大多数が、この課題をヨーロッパ近代史に関する「事実の問題」としては扱わず、超時代的な、普遍的な問題に拡大し、理論的な扱いかたをしている。レトリックを競う論文である以上、単なる事実の叙述に留まらず、学芸の発達と道徳の退廃または向上の間の因果関係を論ぜざるをえなかったし、また、努力と知識を要する事実の検討よりも、自分なりの体系を作り上げ、歴史から拾った例をちりばめる方が、はるかに容易だったからである (Bouchard 前掲書 p. 81)。なお、意外なことに、アカデミーがルソーの論文を評価したのは、それが「事実の問題」をもっとも良く論証していると判断したからである (同前 p. 90)。
- (23) Gouhier 前掲書 第二章
- (24) Havens 前掲書 p. 2-3.

- (25) ルソーが『学問芸術論』の構想を得るについて、ディドロがどの程度関与したのかの問題は、ヘヴンズの洞察に満ち、かつ中庸を得た見解により、一応、解決済みであろう。彼は、アカデミーの課題にたいし否定的に答える着想そのものは、確かにルソーが得たものとしながら、ルソーに懸賞への応募を勧め、励まし、助言を与えたディドロの役割を大きく評価している。
- (26) PL I, 342 第七卷
- (27) PL I, 349 第八卷
- (28) デゾネ夫人の自伝的小説 *Histoire de Madame de Montbrillant* のなかの記述。M. CRANSTON, Jean-Jacques, (N. Y.), (1983), p. 224 により引用。
- (29) F. M. GRAMM, *Correspondance littéraire*, Paris, 1877-1882, t. V, p. 103, Havens 前掲書 p. 18 により引用。
- (30) PL I, 368 第八卷
- (31) PL I, 1108.
- (32) C. C. 144. この手紙によると、この頃の二人は、料金節約のために余り確実でない（信書の秘密の保証されないという意味か）経路で文通をせざるをえなかった。
- (33) この年、テレーズは二番目の子を生み、この子も捨て子に出された。だが、その正確な時期はわからない。また、この年の夏は、デビネ夫人が、ラ・シュヴレットの別荘で催した芝居に役を当てられ、稽古に忙しかったはずである。
- (34) 常識的な考えたが、靈感とは普段の漠然とした思考や想念のいわば結晶作用だろう。後になって思い起こすと、それが強烈であるほど、先立った心的状態は記憶に薄れ、その唐突さが強く感じられる。その靈感が、その後の思考の起点となり、まして、ルソーの場合のように、自己改革の原点となつたとすると、あたかも、すべてが、突如、そこから始まったように記憶が作り変えられる。先述の一七四八年八月二十六日付けのヴァラン夫人への手紙には、尿閉症の再発と胃痛に、ひどく悩まされていることが書かれている。健康の悪化の訴えは、同じくヴァラン夫人にあてた翌年一月二十七日の手紙（C. C. II, 146）にも繰り返されている。ところが『告白』では、病気の再発は、この年（一七四九年）の夏、酷暑のなかをヴァンセンヌに通った結果とされている。ルソーの精神生活がその身体の状態と深いつながりを持っていることを考えると、興味ある思い違いである。

(35) Gouhier 前掲書 p. 38, n. 31.

- (36) 同前 p. 38.
- (37) PL III, 14-15, 平岡昇訳、中央公論社 世界の名著『ルソー』七六一七七ページ。プロゾゴベとは、非実在の人物を想起して、語らせたり行動させたりする修辞の技法である。
- (38) プルタルコス『対比列伝』ピロス 二〇―二一（岩波文庫『プルターク英雄伝』河野与一訳 第六卷 三四―三六ページ）。
- (39) PL III, 14, n. 3.
- (40) 『プルターク英雄伝』河野与一訳 第六卷 三三―三四ページ。
- (41) PL II, 1132.
- (42) PL III, 86, 89.
- (43) PL III, 21 前掲訳書 八四ページ。
- (44) 実際、次に触れる一七五〇年一月三十日付けのヴォルテールあての手紙で、ルソーは「その折に、私に下さったお手紙を決して忘れておりません」と書いている。
- (45) ヴォルテールの父、フランソワ・アルエは公証人であったが、この職業の常として賃金により蓄財し、会計検査院手数料徴収官の職を手にいれ、またバリの市内、市外に家屋敷をもつ裕福なブルジョアとなった。金融・投資の才は、息子のヴォルテールにも引き継がれていることは、周知のとおりである。R. POMEAU, D'Arrouet à Voltaire, Oxford, 1985, p. 16, 30.
- (46) C. C. II, 149, この手紙が書かれた事情などについては、編者リーの注解によった。
- (47) 『学問芸術論』の成功の後、オペラ『村の占い者』によりさらに名声を高めたルソーは、一七五四年、ジュネーヴに帰り、再改宗のうえで市民権を得ている。この帰国についての『告白』第八巻の記述を参照。PL I, 392.
- (48) Gouhier 前掲書 p. 42-43.
- (49) C. C. II, 149, note.
- (50) Voltaire's Correspondance, edited by Theodor Besterman, Genève, 1953-1965, tome 18, p. xxi.
- (51) PL I, 360, 363 第八巻
- (52) C. C. II, 150.